

Charles Dickens, 作品と朗読

岡崎 昭子

序 文

Charles Dickens (1812—70) は、40歳を過ぎてから盛んに自作の朗読会をひらいた。最初のうちは慈善活動としてであったが、彼の朗読がすばらしくまかったので「出演」の依頼が殺到し、やがて有料の公開朗読をアメリカにまで出かけておこなうようになった。その結果、莫大な収入を得ることはできたが、執筆活動は制限され、健康も害して、58歳で死んでしまった。

そのためか、彼の自作朗読に対しては、批判的な意見が多い。彼が有料の朗読会を始めようとしたとき、最初に反対したのは彼の親友で後に Dickens の伝記¹⁾を書いた John Forster (1812—76) であった。お金のために俳優のまねをすると、作家としてのステイタスに傷がつくというのである。当時朗読をしていたのは主として俳優であったし、Dickens も若いころは俳優になろうとした人であったから、舞台への執着から朗読会をひらこうとしたと思われたのも無理はない。そういう要素もすこしはあったかもしれないが、Dickens の手紙から彼の公開朗読の旅行がどんなにハードなスケジュールでおこなわれたかを想像すれば、お金や舞台への憧れからだけでは、とても遂行できなかったであろうと考えられる。しかも、その多忙な旅行中にも、彼は自分の朗読会がいかに成功したか、聴衆に直接語りかけることがどんなに素晴らしいかを、手紙で知らせているのである²⁾。

聴衆に直接語りかけること——これが Dickens を朗読へ駆りたてた重要な動機だったと思う。ジャーナリスト出身の作家であった彼は、たえず読者を意識していた。長女 Mary の記憶によれば、Dickens は書齋に大きな鏡をおいて、創作中に時おり鏡に映る自分の姿に向かって語りかけては、机にもどって書いていたという。本の装訂に凝ったり、挿絵を入れたりして、読者へのサービスにもつとめた。しかし、どんなに努力をしても、作家と読者とは間接的な関係でしかありえない。「作家と読者が

互いに理解しあえる関係をなるべく早く創り上げたい」という彼の願望は、ほとんどこれと同じことばで、*The Chimes* (鐘の精) の冒頭で述べられている。それが思いがけなく慈善朗読会で読者と出あい、彼らが自分のことばに感激して涙を流すのを見たとき、Dickens はどんなにか満足したことであろう。この読者、つまり audience のために、彼はできるだけみごとな朗読をしようとして、わざわざ朗読用のテキストを作り、校訂をして、大切なところはアンダーラインや performance-sign も入れ、余白には“stage-direction”まで書き込んだ。作品によっては数種類のテキストを作成し、シーズンや聴衆のレベル、朗読会の時間などに合わせて選んで用いたようである。

これらのテキストは、Dickens の死後売られて四散したが、ふたたび集められて、ニューヨークとロンドンにコレクション (the Berg と the Suzannet) がある。また Dickens 研究者として著名な Philip Collins 教授が編集した全集³⁾でも、これら全21編を読むことができる。これによると、Dickens が自分の小説から、どのようにして朗読用テキストを作成したか、作品と耳で聞くものとは、どのように区別していたかが明らかになって興味深い。

つぎに、主要なテキストとオリジナルの作品について、これらの点を検討してみる。

1. *A Christmas Carol*

Dickens がはじめて公開朗読 (Public Reading) をおこなったのは、1853年の12月27日であった。パーミンガム市の Town Hall で、生涯教育の基金に寄付するための Charity reading である。クリスマス直後という時期だったので、当然 Christmas Books のなかからもっとも有名な *A Christmas Carol* と *The Cricket on the Hearth* が選ばれた。両方とも2回ずつ朗読し、大成功

で、「当代随一の作家による最高の朗読」と報じられた。それから4年間、毎年クリスマス・シーズンには数回 Charity reading を頼まれて、*A Christmas Carol* (以下「カロール」と記す) をリクエストされている。

「カロール」は、1843年のクリスマス・ブックとして出版されたときから、ベストセラーになった作品であった。貪欲な老人がクリスマスを機会に善人になるというその内容も、万人向きで感動的だし、長編の多い Dickens の作品のなかでは、短くて朗読用に手頃だったと思われる。さらにまた、文章が簡潔でわかりやすいことも、朗読にもっとも適していた。彼は1853年から16年間に、472回⁴⁾の朗読をおこなっているが、「カロール」が読まれたのは、「ピックウィック」とともに、圧倒的に多い。

<i>The Trial from Pickwick</i>	164 (回)
<i>A Christmas Carol</i>	127
<i>Boots at the Holly-tree Inn</i>	81
<i>Doctor Marigold</i>	74
<i>David Copperfield</i>	71
<i>Mr. Bob Sawyer's Party</i>	64
<i>Mrs. Gamp</i>	60
<i>Nicholas Nickleby</i>	54
<i>Little Dombey</i>	48
<i>The Poor Traveller</i>	30
<i>Sikes and Nancy</i>	28
<i>The Chimes</i>	10
<i>The Boy at Mugby</i>	8

朗読テキストの一番簡単な作り方は、小説をカットしてゆく方法で、「カロール」の場合はこれによっている。構成的にもよくまとまった作品なので、Dickens は、はじめのうちテキストを作らずに、本に直接カットする印をつけて用いたようである。そのため、1853年12月に第1回の Charity reading をしたときには、かなりカットしたつもりだったにも関わらず、朗読に3時間以上もかかってしまった。その後、回を重ねるたびに短縮して、1858年4月29日、最初の有料公開朗読会をロンドンで開いたときには、休憩時間(10分の休憩1回と、5分の小休止2回)も含めて、2時間になっていた。この小型テキストは、以後ずっと愛用され、1870年に引退朗読をするときまで使われたという。

つぎに、どのような形で「カロール」が短縮されているかを調べてみる。まず原作のタイトルは、*A Christmas Carol, in Prose* で、副題に“A Ghost Story of Christmas”となっているが、朗読テキストは、*A Christmas Carol, in Four Staves*.⁵⁾(以下、テキストで省略された

部分は、×[印で示す。)

STAVE ONE MARLEY'S GHOST

Marley was dead: to begin with. There is no doubt whatever about that. The register of his burial was signed by the clergyman, the clerk, the undertaker, and the chief mourner. Scrooge signed it: and Scrooge's name was good upon 'Change, for anything he chose to put his hand to. Old Marley was as dead as a door-nail.

Mind! I don't mean to say that I know, of my own knowledge, what there is particularly dead about a door-nail. I might have been inclined, myself, to regard a coffin-nail as the deadiest piece of ironmongery in the trade. But the wisdom of our ancestors is in the simile; and my unhallowed hands shall not disturb it, or the country's done for. You will therefore permit me to repeat, emphatically, that Marley was as dead as a door-nail.

Scrooge knew he was dead? Of course he did. How could it be otherwise? Scrooge and he were partners for I don't know how many years. Scrooge was his sole executor, his sole administrator, his sole assign, his sole residuary legatee, his sole friend and sole mourner. [And even Scrooge was not so dreadfully cut up by the sad event, but that he was an excellent man of business on the very day of the funeral, and solemnised it with an undoubted bargain.

The mention of Marley's funeral brings me back to the point I started from. There is no doubt that Marley was dead. This must be distinctly understood, or nothing wonderful can come of the story I am going to relate. If we were not perfectly convinced that Hamlet's Father died before the play began, there would be nothing more remarkable in his taking a stroll at night, in an easterly wind, upon his own ramparts, than there would be in any other middle-aged gentleman rashly turning out after dark in a breezy spot—say Saint Paul's Churchyard for instance—literally to astonish his son's weak mind.

Scrooge never painted out Old Marley's name. There it stood, years afterwards, above the warehouse door: Scrooge and Marley. The firm was known as Scrooge and Marley. Sometimes people new to the business called Scrooge Scrooge, and sometimes Marley, [but] he answered to both names: it was all the same to him.

Oh! but he was a tight-fisted hand at the grindstone, Scrooge! a squeezing, wrenching, grasping, scraping, clutching, covetous old sinner: [Hard and sharp as flint, from which no steel had ever struck out generous fire; secret, and self-contained, and solitary as an oyster. The cold within him froze his old features, nipped his pointed nose, shrivelled his cheek, stiffened his gait; made his eyes red, his thin lips blue; and spoke out shrewdly in his grating voice. A frosty rime was on his head, and on his eyebrows, and his wiry chin. He carried his own low temperature always about with him; he iced his office in the dog-days; and didn't thaw it one degree at Christmas.

(第一に、マーレイは死んでいた。それには何の疑いもない。彼の埋葬登録簿には、牧師も、書記も、葬儀屋も、喪主も署名をしている。スクルージもサインした。スクルージの名前は、「取引所」関係では、どんなものにも効果があった。老マーレイは、完全に死んでいたのである。

スクルージは老マーレイが死んだのを知っていただろうか？ もちろん知っていた。知らなかったはずがない。スクルージとマーレイとは、何年になるかわからぬほど長い間、事業の共同経営者だったのだ。スクルージは彼のただ一人の遺言執行人であり、唯一の遺産管理者、唯一の財産譲受人、唯一の相続人、唯一の友人で、唯一の会葬者であった。

スクルージは老マーレイの名前を絶対に塗り消そうとはしなかった。だから彼の名前は、その後何年も「スクルージ・マーレイ商会」として、入口のドアの上に残っていた。会社は、スクルージ・マーレイ商会でおおってきたのである。新しく店にやってきた人のなかには、スクルージをスクルージさんと呼んだり、時にはマーレイさんと呼んだりする人もいた。彼はその両方の名前に返事をした。どっちでも同じだったのだ。

しかし、ああ、彼は、ひき臼を握んだら手をはなさ

ないような男だった、あのスクルージは。絞り取る、捻り取る、握り取る、削り取る、つかみ取る、といったガリガリ亡者の老人だった。) [訳文は、朗読用テキストとして残された部分のみ。]

さすが Dickens だけあって、実にうまく短縮している。テキストとしてよく纏っているし、原作からあのような大幅なカットがおこなわれたとは感じられない。かえって、すっきりしたくらいである。というのは、カットされた部分は Dickens の饒舌か、一度いったことを、さらに詳細に述べている部分などで、作品の骨子には影響しないからである。

描写力が弱まるのに対しては、ジェスチャーやエロキューションで補ったようである。強調しなければならない部分には、テキストに下線を入れ、とくに重要なことばには、テキストの余白に声色やジェスチャーの指示を記入した⁶⁾。

構成的には、原作はつぎのようにになっている。

- 第1章 マーレイの亡霊
- 第2章 第1の幽霊
- 第3章 第2の幽霊
- 第4章 最後の幽霊
- 第5章 ことの終り

朗読用テキストも、大体これに従っているが、第4章と第5章が一つになって、4章の構成である。

以上のように「カロール」の場合は、原作とテキストの違いが顕著でないのであるが、一つだけ重要な相違がある。それは、原作の第3章の終り近く (p.108) で、第2の幽霊が自分のドレスのひだの間から、二人の悲惨な子ども——男の子は“Ignorance” (無知) で、女の子は“Want” (欠乏) だという——をとり出してスクルージに見せるところがある。John Leech の挿絵もあって、ゾットするほど不気味であるが、この部分がテキストでは省略され、スクルージの甥の家での楽しいクリスマス・パーティを見せたあと、幽霊の姿は消えてしまう。「カロール」のなかでもきわめて印象深いこの二人の子どもの挿話を、Dickens はなぜ省略したのか。長さの問題もあったとは思いますが、もっと大きな原因は、あの場面があまりにも悲惨なので、朗読会の雰囲気は暗くすると考えたからであろう。作品のなかでは絶えず貧しい子どもの救済をアピールしてきた Dickens であったが、朗読会ではあまり暗いイメージは避けたほうがよいと考えたようである。それは、Dickens の朗読会の入場料がかなり高くなり⁷⁾、聴衆は裕福な市民が大半を占めたからで

あろう。彼が後期の作品を朗読会ではほとんどとり上げなかったのも、そのためであろうと思われる。

2. *The Chimes*

クリスマス・ブックの第2作 *The Chimes* は、「カロール」とは大分事情が変わってくる。第一に、この作品は耳に訴える要素が多く、最初から朗読することを意識して書かれたのではないと思われるほどである。1844年11月3日に完成しているから、公開朗読を始める9年も前であったが、イタリアのジェノアで書き上げた Dickens は、同年12月2日、出版に先だって、親しい人たちに読んできかせるために、ロンドンに帰っている。それは、友人 Forster の家でおこなわれた private な朗読会であったが、集まった人たちは、Thomas Carlyle をはじめ、当代一流の文学者や画家、ジャーナリストたちであった。その日の感動を *The Chimes* の挿絵画家の一人⁶⁾ Daniel Maclise は、わざわざジェノアのディッケンズ夫人にまで知らせたくらいである。

The Chimes も「カロール」におとらないほど評判になった作品であった。その年の12月16日に出版され、3ヵ月たたぬうちに20,000部が売り切れた。ロンドンでは、出版後、数週間のうちに5本以上の脚本が作られて、劇場にかけられた。それらは、とくに天井桟敷の労働者階級の観客から喝采されたという。それは、この作品のテーマが中流階級の風刺にあり、貧しい主人公 Tobias (通称 Toby) Veck や Will Fern が観客の共感をよんだのであろう。“Hungry Forties” (飢餓の40年代) といわれたときのことである。またロンドン方言や、なまりの強い貧民のことばも、読むよりも耳で聞くほうがおもしろかったに違いない。Dickens もいち早くこれに気が付き、後日朗読活動を始めたとき、*The Chimes* のテキスト作成を急いだ。その方法は、「カロール」の場合と違って、大幅な書き換えである。冒頭の部分を比べてみよう。

原作は、D. Maclise の描いた2枚の幻想的な挿絵、「鐘の精」と「鐘のある塔」が掲げられたあと、タイトル・ページとなる。第1章 (First Quarter) の初めにも挿絵が入り、遠景に鐘の妖精たちの塔が見え、手前には ticket-porter (公認配達夫) の Toby Veck が娘 Meg のもってきた弁当を開こうとしている。

FIRST QUARTER

There are not many people—and as it is desirable that a story-teller and a story-reader should

establish a mutual understanding as soon as possible, I beg it to be noticed that I confine this observation neither to young people nor to little people, but extend it to all conditions of people: little and big, young and old: yet growing up, or already growing down again—there are not, I say, many people who would care to sleep in a church. I don't mean at sermon-time in warm weather (when the thing has actually been done, once or twice), but in the night, and alone. (物語の作者と読者とが、できるだけ早く互いに理解を固めることが望ましいので、私のこの意見が若い人たちや小さな子供たちだけでなく、あらゆる種類の人たちにまで広がって気づいてほしいと願っている。つまり、小さい人も大きい人も、若い人も年をとった人も、まだ成長期にある人も、すでにふたたび縮まりかけている人も——教会で平気で眠れる人は、多くはいないであろう。暖い日の説教のときのことではない。[そういうときなら、実際に1度や2度は眠ったこともあるが]夜中に、しかもたった一人で眠るのである。)

この作品は、鐘の精による超自然的な幻想物語であるから、Dickens は鐘の精たちの住む不気味な教会の塔から話を始めている。小説でありながら、読者に話しかけているような語り口である。

いっぽう、朗読テキストのほうは、この導入部が全部省略されて、簡単に鐘楼が紹介されたあと、ただちに主人公 Toby Veck へと話題が移る。

FIRST PART

High up in the steeple of an old church, far above the town and far below the clouds, dwelt the Chimes I tell of.

Old Chimes, but not speechless. They had clear, loud, lusty, sounding voices; and they rang out far and wide—'beating all other bells to fits', as Toby Veck said; for though they chose to call him Trotty Veck, his name was Toby. And I take my stand by Toby Veck, though he did stand all day long in all weathers, outside the church door. In fact he was a ticket-porter, Toby Veck, and waited there for jobs. [下線は Dickens が付したものである] (古い教会の高くそびえたつ尖塔のなかに、巷^{ちまた}よりはるかに高く、雲よりはるかに低いところに、私のお話する鐘の精たちは住んでいました。

古い鐘でしたが、鳴らなかったわけではありません。どれも、澄んだ、大きい、力強い、よく響く声をもっており、はるか遠く、広く、鳴り渡りました。トビイ・ベックがいうように、「みんな、互いによくぶつかり合いながら。」人々は彼をトロッチィ・ベックとよんでいましたが、彼の名前はトビイでした。だから、私はトビイ・ベックを支持してその側に立つことにしましょう。といっても、彼は、雨の日も風の日も一日中、教会のドアの外に立っていたのですが……。実は、彼トビイ・ベックは、公認配達夫だったので。そこで、仕事を待っていたのです。）

原作と比べてみると、ほとんど全面的に書き換えられているが、部分的な語句——たとえば high up in the steeple や far and wide のようなリズムカルな語句、また clear, loud, lusty, sounding voices のような音の響きが効果的な語句は、そのまま残されている。さらに、I take my stand by Toby Veck, although he did stand all day long outside the church-door. (原作による) のように、take my stand by の stand と、he did stand をかけて語呂合わせをした部分も、もちろん生かされている。Dickens はこの種のジョークを、朗読テキストには数多く入れて、自分も楽しんだようである。上の引用から2行目(原作では5ページ後)には、正午を知らせる鐘が鳴り、老 Toby Veck は dinner-time だと気づいて一人言をいう。

‘Dinner-time, eh! Ah!* There’s nothing more regular in its coming round than dinner-time, and there’s nothing less regular in its coming round than dinner. [*印は原作が省略されていることを示す] (おや! ディナータイムだ。おお。ディナータイムほど正確にやってくるものはないなあ。それに、ディナーくらい、めったにやっこないものもないなあ。)

このジョークもおもしろく、ディナーをめったに食べることのできない老人のことばながら、悲愴感がない。

「老人」といったが、Toby Veck は原作では ‘over sixty’ となっているが、朗読テキストでは ‘over sixty-eight’ と年齢がふえている。朗読会では多少大げさといったほうが効果が上ると思ったのか、数字は概して増える傾向があり、形容詞や副詞も多く使われている。ロンドン方言や俗語の数も増え、Dickens の巧みな朗読で聞けば、さぞおもしろかったであろうと思われるが、この例は枚挙のいとまがないので省略する。

なお *The Chimes* の原作の主題は、中流階級に対する

痛烈な批判であったが、すでに述べたように、Dickens の朗読会の聴衆は中流の人たちがほとんどだったので、テキストでは社会風刺は軟化して、単なる夢物語になった感じである。

3. *Doctor Marigold*

5冊のクリスマス・ブックとともに、Dickens のクリスマスもので忘れられないのが、21編の *Christmas Stories* である。長さが手頃だということもあって、このなかの数編も朗読会で読まれることがあった。そのなかで、Dickens がもっとも気に入っていたのが、*Doctor Marigold* だったという。1865年のクリスマス物語として、Dickens の編集していた雑誌 *All the Year Round* に掲載され、ひじょうに好評であった。Dickens は、ただちにこれも朗読用に短縮して、翌年4月に公開朗読するまでに、実に200回以上も練習したという。さらに一般公開する前に、Browning, Wilkie Collins, 友人の Forster らを集めて private な朗読会をひらいた。

なぜ Dickens がこの短編小説にそれほどまで打ちこんだのかと考えてみると、やはりそれは、Dickens のヒューマニズムからであろう。彼の生涯のモットーであった「貧しい人々や子供たちの救済」の主題は、この作品にも一貫して流れている。ただしそれが *The Chimes* におけるような烈しい社会批判として表われるのではなく、社会の底辺で生きる行商人 Cheap Jack が聾啞の孤児 Sophy にそそぐ無償の愛となって表現されているのである。Dickens は当時53歳、熟年になっていた。彼があわれな聾啞の娘 Sophy について述べる時、真に迫った表情になったという。

作品のタイトル “*Doctor Marigold*” は、主人公 Cheap Jack の正式の名前である。行商人の彼は、もちろん医者でもなければ博士でもない。出生のとき、貧しい母親から無料で彼をとり上げてくれた医者になんて、*Doctor* と名づけられたのであった。

短編であるから、大幅な削除は必要ないが、それでも時おり、「カロール」のような方法で、ばっさりカットされた部分もある。原作が3つの章で構成されているのに対して、テキストのほうは2章から成る。

ユーモアとペースの混ったこの作品のテキストには、欄外に stage-direction が数多く書きこまれている。“Pause” の印が随所にあるし、「ここで区切って、溜息し、体を前方にややのり出す」などの指示もある。俗語も数多く、*Pickwick Papers* に頻出する v と w の交換が、ここでも目立つ⁹⁾。また “*Dickensian Cockney*”

とよばれる彼得意の造語¹⁰⁾も、朗読の魅力の一つであったと思われる。

4. *David Copperfield*

Dickens が自分のお気に入りの子供 (my favourite child) とよんだ *David Copperfield* (1849—50) は、よく知られているように、自伝的要素の多い作品である。とくに幼年時代や青春時代の体験が、多少脚色された形で入っている。オリジナルのタイトルは、The Personal History, Adventures, Experience, and Observation of David Copperfield, the Younger, of Blunderstone Rookery. という長いもので、そのあとに (Which He never meant to be Published on any Account.) と小さな活字で付け加えてある。主人公 David に出版するつもりはなかったといわせたけれども、実際には Dickens の代表作として愛読されている。George Orwell は9歳のときこの小説を読んだそうであるが、100ページくらいまでは、子どもが書いたものかと思ったという。それほど、少年 David の目を通して、生き生きと彼の周囲が描かれている。

1861年の夏、Dickens は *Great Expectations* を完成して、ただちに *David Copperfield* の朗読作成にとりかかった。秋から始まる地方公演のために、新しいテキストが必要だったのである。8月の末、友人 Forster に宛た手紙のなかに、つぎのような一節がある。

Every day for two or three hours, I practise my new readings, and (except in my office work) do nothing else. With great pains I have made a continuous narrative out of *Copperfield*, …… (毎日、2, 3時間は新しい朗読の練習をしている。それで、仕事場にいるとき以外には、他には何もしていない。ひどく苦勞して、「コッパーフィールド」から一続きの物語をつくったよ。……)

64章から成る長編小説 *David Copperfield* を縮めて朗読用テキストを作ることが、どんなに骨の折れる仕事であったか、想像に難くない。結局 Dickens は、上の手紙にあるように、小説のプロットを追って、story-teller になりきることにした。この方法は、*Dombey and Son* からテキスト (*The Story of Little Dombey*) を作ったとき、すでに経験済みであったが、*Little Dombey* は必ずしもテキストとして成功作とはいえなかった。子どもの主人公が中心になるため、个性的でおもしろい脇役がかすんでしまったからである。

David Copperfield の場合は、主人公が最初は小さく

でも、しだいに成長して大人になるから、事情は異なるのであるが、Dickens は慎重にかまえて、たとえば Mr. Micawber のような個性はなるべく生かしながら、除々に削減していった。数種類の色のインクを使いわけて、小説から1万語削減し、最初は2時間用のテキストを作った。1861年10月、はじめて朗読したときには、これによっている。しかしその後、Dickens はさらにこれを短くして、翌年1月、1時間半用のテキストを作り上げた。そしてこれを ‘morning readings’¹¹⁾ のとき使い、夜の朗読会では、従来の2時間テキストを用いたようである。

このように苦勞して作ったものであったから、朗読用の *David Copperfield* も、Dickens にとっては、自分の子どものようなものであった。「他の作品を読むよりも、ずっとおもしろいですよ。私がああテキストにどんな愛情をもっているか、正直にいうと、はずかしいくらいですね。」と語っている。1863年、ロンドンで一連の朗読会をひらいたとき、Dickens は会場に決っていた St. James Hall をやめさせて、Hanover Square Room に変えた。このホールは音響効果がよかったから、ここで *Copperfield* の朗読をやりたかったのであった。

それでは、実際にそのテキストがどんな形をとっているかについて、簡単に述べる。まず一番初めに作られた1861年版は、5章構成だったらしいが、現在見られるものは、6章で構成されている。原作が64章から成る大作であるから、いずれにしても、驚くほど短縮されたわけである。原作の第1章 ‘I am Born’ は David の出生当時のようすが述べられているが、テキストの第1章では、すでに青年になった David が、友人 Steerforth を連れて、幼年時代の思い出のある Mr. Peggotty の家に来て、やってくるころから始まる。ここで、やがて彼らを裏切る Steerforth の描写 (David よりも6歳年長で、ハンサムで頭がよく、気がおけなくて……) があるが、これは原作には出ていない。つまり Dickens は、善意の青年 David の生き方と、それと対象的な Steerforth の生き方を対比させる。そして人のよい Mr. Peggotty が、どんなに Steerforth を歓迎するか、Mr. Peggotty の甥ハムと養女エミリーが、どんなに愛し合っているかを描く。

第2章は、2週間後にハムと結婚することになっていたエミリーの駈落ち。相手が Steerforth と知って、David, Peggotty 一家、ハムの驚愕。

第3章：ロンドンでの David の独身生活。ドーラへの恋と、Mr. Micawber の破産。Mr. Peggotty はエミ

リーを探しに外国に出かける。

第4章：数カ月後、何の手がかりもなく帰ってきた Mr. Peggotty と David が、ロンドンで偶然に出会う。

第5章：David と Dora との結婚、Dora は無能な幼な妻だが、David は彼女を寛大に愛しつづける。

第6章：エミリーの発見。海の嵐とハムの死。Steerforth の死体発見。

以上で明らかなように、テキストでは David の幼稚な妻 Dora の死や、その後、聡明な女性 Agnes と再婚したことも省略されている。つまり Dickens は、David の一生を扱わないで、青春時代に焦点をしばり、誠実で優しい David の生き方と、親友まで裏切った、善意の人たちの人生を狂わせた Steerforth の生き方を対比的に示したのである。この手法は、*Pickwick Papers* のなかから一つだけエピソードを抜いて朗読テキストを作った方法と似ているが、*David Copperfield* のようなすぐれた長編小説の場合のほうが、はるかにむずかしかったと思われる。しかも、努力のかいあって、Dickens も満足できるテキストができ上がったわけである。Dickens がこれに愛着を感じたのも、無理はない。

1870年の1月から3月にかけて、彼は引退朗読会をおこなった。すでに健康を害していたので、医者から朗読をやめるようにと警告されたのである。最後の朗読会は、3月1日であった。Dickens は、*David Copperfield* を朗読した。嵐の場面と Steerforth の死のところでは、聴衆は体がしびれて動けなくなったように感じたと、Thackeray の娘 Annie は述べている。それから3カ月後に、Dickens は死んだ。

(注)

- 1) John Forster: *The Life of Charles Dickens*, (1872, 3 vols.) 1876年の改訂版は 2 vols.
- 2) *The Letters of Charles Dickens* (1880—82, 3 vols.) ed. by Georgina Hogarth & Mary Dickens.
- 3) *Charles Dickens, The Public Readings*, ed. by Philip Collins (1975, Oxford, 全21編) ほかに同じ編者による *Charles Dickens, Sikes and Nancy and Other Public Readings* (1981, Oxford, The World Classics) これには12編しか入っていない。
- 4) 1回の朗読会で作品を二つとり上げることもあったから、472回という数字とその下の作品の数とは一致しない。
- 5) Dickens は、Chapter の代わりに Stave や Quarter を用いることがある。
- 6) エロキューションは、'Low' 'Mystery' 'Cheerful' など、ジェスチャーのときは 'Action' と記している。
- 7) Dickens の朗読会の入場料は、当時の有名なシェイクスピア俳優 Macready の朗読会よりも高かった。もっとも Dickens は、貧しい人たちのために、いつも若干の安い席も用意させたというが。
- 8) *The Chimes* の挿絵は、「カロール」の挿絵を描いた John Leech と、Dickens の友人の画家二人 Maclise と Clarkson Stanfield、および若手の Richard Doyle が協力して担当した。
- 9) woter (voter), uniwersal (universal), wiolence (violence), aggrawating (aggravating), wery または werry (very), vife (wife), ven (when), etc.
- 10) たとえば、opposite→oppo-sight, put→putty, joints→jints, owner→howner, etc.
- 11) 'morning readings' とはいっても、昼間のコンサートのように、午後2時半か3時に始まるものであった。